

アーカイブズと私

—大阪大学での経験—

クロスカルチャー出版

阿部武司

目次

はじめに	1
第一章 図書館・博物館・文書館	3
第二章 企業アーカイブズと大学	13
第三章 大学アーカイブズと企業アーカイブズ—現状と課題—	29
第四章 アーカイブズ創設とアーキビスト	41
第五章 大阪大学アーカイブズの構築	69
(1) 大阪大学文書館設置準備室だより発刊に寄せて	70
(2) 大阪大学の歴史から学ぶもの	73
(3) 大学史の編纂と文書館	77
(4) 『大阪大学アーカイブズニューズレター』の発刊に寄せて	80
(5) 大阪大学アーカイブズの創立と国立大学文書館	82
(6) 退任のご挨拶	87
(補論) 大阪大学名誉教授の談話記録に関する経済学部同窓会員宛のお知らせ	88
第六章 日本の官公庁における文書保存	93
(1) 日本の官公庁における文書保存の状況	94
(2) 貿易・通商政策史の編纂を振り返って	96

第七章 外国のアーカイブズ	101
(1) 中国上海市における歴史的資料の保存状況に関する調査報告	102
(2) 書評「大西愛編『アーカイブ・ボランティアー』国内の被災地で、そして海外の難民資料」	111

第八章 大阪大学経済史・経営史資料室

(1) 大学改革における「不易」	118
(2) 大阪大学経済史・経営史資料室	121
(3) 日本紡績協会資料について	127
(4) 旧三和銀行所蔵資料について	134

第九章 社会科学研究所の国際化

(1) 二〇世紀における英国北西部と関西のビジネスの変遷	137
(2) 人文・社会科学の国際化をめぐる一綿業史研究の現状と問題点	150
(3) 人文・社会科学の国際化をめぐる二―ジャーネット・ハンター教授の近著に関連して―	153

第一〇章 読書の効用

(1) 大学生と読書	164
(2) 情報化時代と読書	167

参考文献

あとがき	171
関連年表	176
初出文献一覧	180
『アーカイブズと私―大阪大学での経験―』要約	183

はじめに

本書は、私が大阪大学（以下、しばしば阪大と略記）大学院経済学研究科に教員として在職していた二二世紀初めごろの十余年間に執筆し、あるいは後に当時に振り返って書いた大学や学界に関するエッセイを取りまとめたものである。国立大学の改革が本格化した当時、私は、大学のインフラともいえるべき図書館、博物館そしてアーカイブズ（文書館）の学内運営に関わり、不思議な成り行きから大阪大学アーカイブズの設立という重責を担うことになった。書名は、その点に由来している。収録した拙文には大きな修正を加えていない。個人の所属・役職はその当時のもの、本文中の「」内は筆者の補註である。

第一章では、私が様々な大学行政のうち、上記三機関のすべてに関わったことが説明されている。第二章では、経済史・経営史研究に従事してきた私が、一九九〇年代に社史や経済団体の年史の執筆を経験し、また研究の国際化が進む中で欧米の図書館・博物館・アーカイブズの実態を知ったこと、二〇〇〇年代に長引く不況を背景として阪大の図書館や経済史経営史資料室に企業関連の資料が受け入れられるようになってきたこと、また私が阪大アーカイブズの構築を進めるようになったこと、二〇一〇年代には大学の外で企業アーカイブズとの関わりが増えたことなどが述べられる。第三章では、大学と企業のアーカイブズの異同についての私見が示される。

第四章は二〇〇四（平成一六）年春に突然、私が阪大内にアーカイブズを創る責任者になり、その後十年がかりで、それを実現していった経緯を語った講演の記録である。アーカイブズに関

する素人である私は、文字通りゼロから組織を立ち上げ、優秀なアーキビストに助けられつつ、様々な障害を克服して二〇一三（平成二五）年一〇月に大阪大学アーカイブズを創立し、翌年四月に、同アーカイブズは、公文書管理法に基づく国立公文書館等および歴史資料等保有施設として内閣総理大臣の指定を受けることができた。この過程で、まず同アーカイブズの前身である文書館設置準備室、その後大阪大学アーカイブズが年に二度刊行してきたニューズレターに寄稿した主なエッセイをまとめたものが第五章である。

この間の二〇〇八年から一三年まで私は、経済産業省のプロジェクトの『通商産業政策史（一九八〇～二〇〇〇）』全一二巻中の第二巻、通商・貿易政策の編集・執筆に従事し、中央官庁の文書管理の実態に接する機会を得た。第六章ではそれについての私見が述べられている。

第七章は、実際に訪問した中国上海市の三つの図書館・アーカイブズの視察記録を中心に外国のアーカイブズを紹介したものである。

第八章は、私が二六年間在籍した大阪大学大学院経済学研究科・経済学部、そしてそこに属す経済史・経営史資料室の二〇〇三年時点における活動を紹介し、さらに、二〇〇〇年に阪大総合図書館に受け入れられた日本紡績協会資料について説明する。

第九章は、二〇世紀末から私が関わってきた外国人研究者との交流とその成果の一端を紹介したものである。

最後の第一〇章では読書に関する私見が述べられる。

化以前にすでに電子ジャーナルが登場しており、外国出版社がその無料トライアルを実施していた。二〇〇七（平成一九）年頃にはそれが理系ではすでに必需品となっていたが、エルゼビア社をはじめとする出版社側に約四億円という巨額の使用料を毎年支払わざるを得ず、その料金を各部署がどのように分担するかが深刻な問題となっていた。二〇一〇年にも電子ジャーナル問題は相変わらず重要ではあったものの、料金の大部分を阪大が全学的に負担するルールがすでにできしており、各部署が支払う金額は大きく減少していた。また、電子ジャーナルのみならず電子書籍の購入希望が文科系からも始めており、伝統的な紙媒体に加えて電子資料が図書館において重要な地位をすでに確立していることが理解できた。（三）二〇〇七年頃には、個々の大学が学位論文や紀要等を電子アーカイブ化し、収集・発信する機関リポジトリを阪大図書館も試行中であったが、二〇一〇年にはそれが実現していた。

次に博物館であるが、法人化の前後に文部科学省が国立大学に博物館を創ることを奨励していた時期があり、二〇〇二年に大阪大学総合学術博物館が設置された。当初は全学的に展示への協力を求められていたので、私が所属する経済学研究所の経済史経営史資料室も故作道洋太郎名誉教授旧蔵の藩札コレクションを公開したことがあったが、私はその時には中心となつてかわつたわけではなかった。しかし、二〇〇四年以来、後に述べる文書館設置準備室（以下、準備室と略記）の運営を江口太郎博物館長にご支援いただくことになったのがご縁となつて、豊中キャンパス内にある旧医療短期大学の建物を修築して二〇〇七年に完成した博物館の新展示場（待兼

山修学館）に設置された、阪大の歴史に関する展示コーナーを準備室が担当することになった。この常設展示は現在でも続いている。さらに翌二〇〇八（平成二〇）年春には江口館長から経済学研究科への企画展示（年に数回、各部署が博物館と共催で実施）に関する協力のご依頼があり、沢井実教授と私が「東洋のマンチェスターから『大大阪』へ——経済でたどる近代大阪のあゆみ——」と題する展示をお引き受けし、阪大経済史経営史資料室が所蔵する資料を中心に東洋紡、クラブコスメティックス、大阪企業家ミュージアム等の企業・団体・個人から拝借した資料を加えて三か月弱の間開催した。その際、江口先生のほか橋爪節也教授と廣川和花助教から賜ったご指導のおかげで、博物館の展示とはいかなるものなのかを身をもって体験できた。なお、この展示の概要を伝える図録が、大阪大学総合学術博物館叢書『東洋のマンチェスターから「大大阪」へ——経

濟でたどる近代大阪のあゆみ——』（沢井氏と私の共著、大阪大学出版会、二〇一〇年）として後日出版された。

さて最後が文書館である。欧米や中国では文書館（archives）は長い歴史を持ち、官庁、企業、大学など多くの機関ごとに設置されることが多く、各機関にかかわる歴史的文書を選び抜いて整理し保管しつつ閲覧の希望に対応するのがそ



大阪大学総合学術博物館の展示に関する叢書
（2010年11月刊行）

私が大阪大学に教員として赴任してから四半世紀近くになる。これだけ長い間お世話になると、学生を教え研究をしているだけではなく、大学の運営にも微力ながらご奉仕するのは当然のことであろう。私もそうした役職をいくつか担当してきたが、それらを総称したいわゆる学内行政との関連で大学教員としてかなり珍しい経験をしてきたことをここでご紹介したい。大学に図書館が置かれていることはどなたもご存知であろうが、博物館を設置している大学はそう多くないだろう。図書館については名前すら聞いたことがないという方が少なくないと思われる。私は、この三つの機関全ての運営にかなり深くかかわってきたのである。

三つの機関の中で最も早くからお付き合いしているのが図書館である。現在阪大には豊中、吹田、箕面の三つのキャンパスがある。文科系理科系とも多数の部局がある豊中キャンパスには総合図書館が、理科系部局の集中した吹田には生命科学図書館と理工学図書館がそれぞれ設置されている。二〇〇七（平成一九）年の大阪外国語大学との統合に伴い加わった箕面キャンパスには外国学図書館が設けられている。以上四図書館にはそれぞれ副館長が任命され、理事兼副学長の一人が全学の図書館長を務めている。

私は、国立大学法人化（二〇〇四年四月。以下、法人化と略記）の三年前の〇一年度に当時の豊中地区図書委員会委員となり、翌年度にその委員長を務めた。その後〇七年にその頃は本館と称していた現・総合図書館担当の副館長に任命され、一年三か月後に大学院経済学研究科長・経済学部長に選ばれたためいったん辞任した。その任期二年を終えた翌日の二〇一〇年六月末に、一

人をもって代えがたい」(?)ということか、再び総合図書館担当の副館長に任じられ現在に至っている。

とびとびながら、一〇年間余り図書館の運営に関わったことから、以下の変化を経験できた。

(一) 法人化後の図書館は、以前に比べて利用者へのサービス向上に意識的に務めるようになった。

法人化に伴い中期（六年間）及び毎年度に目標を立ててその実現を図るようになったことにもよるのだろう。シカゴ大学の事例などを参考にして阪大図書館の理念を作成したこと、学内外での研修に参加して図書館の運営に関する話をしばしば聞いたこと等が印象に残っている。二年後の二〇一〇（平成二二）年に図書館行政に戻ったときにはさらに、学生が自由に討論等ができる空間ラーニング・コモンズの新設、米国で開発された図書館サービス改善のためのアンケート LIBQUAL の実施、学生への小論文執筆の方法等を職員が教えるリテラシー教育、開館時間延長等の利用者サービスが急速に充実したことに驚かされた。これは職員の方々の皆さんの尽力もさることながら小泉潤二館長のリーダーシップによるところが大きかったと思う。(二) 法人



大阪大学附属総合図書館（2019年11月。豊中市）

の任務である。最近では韓国の文書館も充実してきている。これらの諸外国では、歴史研究者の利用はいうまでもなく、たとえば自分の家のルーツを知りたい人が文書館を気楽にたずねて、それを詳しく調べるといったことが日常的に行われており、そうした利用者をサポートしてくれるのがアーキビスト (archivist) である。

日本でも国立公文書館が一九七一 (昭和四六) 年に東京に設置され、また五九年の山口県文書館の開館以来、地方自治体でも文書館が置かれるようになった。三井文庫、住友史料館、渋沢史料館など企業や経済人のそれもある存在するし、大学の文書館も相当数設置されている。しかし、文書館自体が日本人には、どうもなじみが薄いように思われる。図書館では司書 (librarian)、博物館では学芸員 (curator) という専門家が配置されているのは周知の通りだが、先ほどふれたアーキビストには訳語がない。このこと自体が、日本人の文書館に対する認識の低さを物語るものであろう。本年 (二〇一一年) 平成二三年) 春にいわゆる公文書管理法が施行されたことをご存知の方がおられるかもしれない。しかしながら、関係者からは「公文書管理法ができたのを機に、面倒な書類をできるだけ廃棄することにした」という本音をしばしば聞かされた。こうした発想自体が、現代の日本人の歴史意識の低さを反映しているように思われる。「古いことなどどうでもよい」と思っている人が少なくないこと自体残念だが、ここではこの点に立ち入らず、身の歴史にすら無関心な日本人が外国人に比べて多いことが、文書館の知名度の低さをもたらしていると思われることのみを指摘しておきたい。

ところで、建学の理念を重視することが多い私立大学では、大学史資料館のような施設を設けている所が少なくないのに対して、国立大学ではそれらがあまり設置されていなかった。しかし、大学史の編纂、二〇〇一 (平成一三) 年度における情報公開法の施行、さらに国立大学法人化等を契機として、比較的大きな国立大学では文書館等が二一世紀に入るところから増えてきた。

そうした流れのなかで、法人化の実施間際の二〇〇四年早春のある日、河上誓作大学院文学研究科長ほか数人の方の訪問を受け、「以前、大阪大学五十年史が出版されたころ、編纂に関係した有志が、『今後も大学史の編纂は続けるべきであり、そのためには関連資料を日常的に収集しておく必要がある』ので、大学史編纂室をぜひ阪大内に置いてほしい」と時の総長にお願いしたところ、却下となった。最近では、大学史編纂室よりもさらに活動の幅の広い文書館が国立大学では主流になってきているが、旧七帝大中、文書館的組織がないのは阪大だけになってしまった。法人化を好機としてそれを阪大でぜひ実現したいので、あなたにその旗振り役になってほしい」というご依頼を受けた。歴史家の端くれである私は、文書館に保管されているものも含めて様々な資料を使うことに慣れてはいたけれども、文書館自体の運営等についてはほとんど知識もなく、ご依頼に応じ兼ねたが、河上先生の重ねてのご懇請にはお応えせざるをえず、大役をお引き受けすることになった。

幸いにも、当時の総長宮原秀夫先生は文書館の設置の必要性をすぐに認めて下さり、法人化後に設けられた総合計画室がお世話をしてくれることになった。同室ご担当の鈴木直副学長は、私

を主査とする全学的なワーキンググループを組織して下さり、そこでの一年間余りの検討を経て、二〇〇六（平成一八）年七月に文書館設置準備室が発足する運びとなった。室長である私の下に専任講師一人、事務補佐員二人が置かれ、豊中キャンパス内の二室を拝借することになった。専任講師には広島大学文書館の創立に携わった菅真城氏かんまさきをお迎えできた。

国立大学文書館の最大のミッションは、事務方が現用文書として使ってきた書類（法人文書）のうち保存年限が過ぎたものを、あらかじめ設けた受入れ方針に基づいて文書館に移管し、大半の文書を廃棄したのち厳選された文書を整理・保存・公開することである。それを行うためには書庫を中心にかなり広いスペースを確保し、書架等の設備も整えて、政府の認可を得なければならぬ。われわれの準備室は、その実現の準備を進めるとともに、元教員や卒業生等から講義ノートなどの寄贈資料も受け入れ、また全学教育科目「大阪大学の歴史」を運営し、さらに名誉教授を中心とした方々に阪大在職中の思い出を語っていただくビデオを撮影するといった業務も実施してきた。

その間、二〇〇九年度には、第二期中期目標期間中（二〇一〇年度以降の六年間）の早いうちに文書館を阪大に設置することが承認され、この二〇一一年度からは旧大阪外大の箕面キャンパス内にある、スペースが広い建物の一部の使用と嘱託職員一名の採用が認められた。数年先には設置準備室の語句が取れ、晴れて本格的な文書館が阪大内に設置される予定である。

私が、過去七年間近く文書館の設置の必要性を阪大内で説く時、しばしば聞かされたことは、「古い資料などっておもてに役に立たない」、「文書館ができたところで一年間に何人お客さんが来るのか」、「文書館設置準備室の顔が見えない」等々であった。確かに、展示を見てくれる人々の耳目をひきつけるような、一見して魅力的な文書は阪大では非常に少ない。閲覧者が図書館や博物館の入館者数とは比較にならないほど少ないのも間違いあるまい。しかしながら、文書館はいわば、裏方である。映画や演劇でも脚光を浴びるスターの裏に振付、衣装、伴奏音楽、照明など「顔が見えない」多数の裏方があるからこそ、公演も成功するのではなからうか。阪大文書館は、記録を後世にきちんと残すのが本務であり、さらに、その資料を年史編纂、大学史研究、自校史教育など教育・研究のために提供する裏方なのである。旧知の高名な歴史家（三谷博東京大学名誉教授）が以前私に、「阪大の歴史を調査したかったので、図書館に問い合わせたところ、関連資料を保管している部署がないのに驚いた」と語っていた事実も紹介しておきたい。

私は、最近の約一〇年間、以上のように阪大内の三機関にかなり深くコミットしてきた。その分、研究時間は当然減るため、自分が貧乏くじを引いた気分にとらわれたこともあるが、それでも限られた時間の中であれ、そうした人類の知的遺産について考えることができたのは幸いであつた。図書館と文書館との付き合いはもうしばらく続きそうである。（二〇一二年二月）

第一〇章 読書の効用

(1) 大学生と読書

大学生が専門書はおろか教科書も読まなくなったと聞くようになってから久しい。大学で長年講義やゼミを続けてきた私の経験から見て、その説はどうやら当たっているように思われる。現代の若者たちは書物に頼らなくても様々な情報の入手源を持つているから、そうした傾向にむやみに目くじらを立てる必要はないという意見もあるかもしれない。とくに知りたいことに一応の解答を瞬時に与えてくれるインターネットの存在は、「学術書などもはや要らない。ウェブサイトからはあらゆる知識が得られるのだから」などという主張の正しさを裏付けるかのように見える。しかし、そこにあふれている情報のかんりの部分が信用するに値しないことを忘れてはならない。某新聞記者が Wikipedia に書かれていた誤った情報を無批判に記事に流用して問題になったことが報道されていたが、インターネットからは慎重に情報を選ばないと、取り返しのない誤りを犯しかねないのである。

しかも、断片的知識をいくら入手したところで、それらは粘り強い思考力には決して直結しない。平凡な主張ながら私は、学生時代には簡単に理解できない書物、あるいは分厚い書物を読む訓練を通じて深い思考力を養っておくべきだと思う。ゼミなどで学生と輪読して気付くのは、一冊の書物を初めから終わりまで読み通す習慣を身につけている学生が少ないこと、しかも一週間に割り当てるページ数を、例えば一〇〇ページ以上にと十分に内容を消化できない報告者がしばしば出現することである。

それに対してアメリカ合衆国の一流大学では、教員が毎週五〇〇ページ位の書物一冊を学部学生に割り当てて、一週間後に一時間で全てを要約させるというようなことが自然に行われているとしばしば耳にする。□の自家本元のアメリカで、優秀な学生が□を利用する一方、学術書の読破に追われているという一見古臭い事実の重みを日本人は十分に認識しなければいけない。アメリカの優秀な人々は、学生の中から大量のページ数を速く正確に読みこなせるように訓練されているのである。

先に見た日本での状況も教員の指導、あるいは先輩や友人との交流を通じて改善できるように思われる。私が東京大学に入学した一九七二(昭和四七)年には大学紛争の名残りが強く、大学生がマルクスやサルトルを読むこともまだ盛んだった。当時の東大では駒場の教養課程に在籍する一二年生向けのゼミナールが多数開講されていた。それらの内容は千差万別であったが、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(もちろん邦訳ではあったが)をテキストとするゼミが複数あったことなどを記憶している。現在ではこうした古典があまりにも読まれなくなっているようだが、今から四〇年近く前には大学に入って間もない学生もそうした難しい書物を読もうとする風潮が存在していたのである。

私も、のちに勉強する予定であった経済学にはあまりこだわらず、いくつかのゼミに出席してみた。とくに記憶に残っているのは二年生の時に一学期だけ出席した、新進気鋭の政治学者佐藤誠三郎助教授のゼミであり、当時はやりの日本人論がテーマであった。定員二〇人程度のところ

に五〇人以上の志望者が集まったが、選抜は三冊の指定された書物を要約した四〇〇字換算一〇枚の文章の提出で、それに応じることができた人数は大体定員通りであり、全員の出席が許可された。その後の授業では毎週一〜二冊の書物を全員が必ず読んでくることが求められ、証拠として簡単なレジュメを全ての出席者が提出しなければならなかった。授業終了時に約二〇冊を読破できた二〇歳代初めのこの経験は、私に大きな自信を与えてくれ、その後の学術書の読破を容易にしてくれた。この佐藤ゼミは一九六七（昭和四二）年に始まり、佐藤先生の米国ご留学の二年間を除いて二〇年間余り続いた。受講生にはその後、研究者あるいは政治家として大成した人も含まれ、現在東京大学教授の御厨貴氏や民主党政権の外務大臣を務めておられる岡田克也氏も同じ頃に受講していたそうである。学生に多読と討論を厳しく求めた佐藤先生は、その厳しさゆえに、後日才能を開花させる優秀な学生たちを引き付け、彼らに多大な薫陶を与えたに違いない。

私の学部生時代には佐藤ゼミのような少人数授業に参加するほか、学生同志のサークルや研究会にも積極的に加わり、そこで書物を輪読する学生が珍しくなかった。煙たい教師がいない同年代の学生だけの集まりは、それ自体楽しいものであり、齒に衣を着せない相互批判の中で、一人では読めない難解な本や大部な本を読破する得がたい機会であった。教養課程の時、歴史科学研究会というサークルに所属していた私は、入学時にまったく知識がなかった、日本の社会科学の水準を比較的に高めたといわれる昭和戦前期の日本資本主義論の意義を仲間から教わり、石母

田正、永原慶二、神島二郎などの著作を、十分に理解できないながらもとにかく読み進めていった。駒場から本郷の経済学部に進学した三年生以降には、当然のことながら専門の勉強が中心にはなったものの、そこでも演習と呼ばれていたゼミと、友人や先輩たちとの読書会には積極的に参加した。

法人化以後の国立大学では教育が重視されるようになった。私の学生時代の大学における教育、とくに大教室での講義には確かに問題が多かった。それらが大幅に改善されつつあるのはまことに結構なことである。その際、教員が学生に、パワーポイントなどを使ってわかりやすく教えることも必要なかもしれないが、難解なあるいは大部の重要な書物をきちんと読みこなせるように指導することは、現在でもなお必要であろう。さらに学生諸君自身が、教室の外で友人や先輩と読書会を開き、自由に議論を闘わすことも有益と思われる。世の中が時々刻々と変化していく今日、時間をかけて古典や専門書を読むことは難しいのかもしれないが、逆説的ながら、こうした時代にこそ学生は、落ち着いてゆっくり読書を楽しむことが肝要であろう。世の中を良くしていくには粘り強い思考力が不可欠であり、その力を養うには読書が極めて有効であるからである。（二〇一〇年一〇月）

（2）情報化時代と読書

「情報化時代」といわれるようになって久しい。三〇〜四〇（四〇〜五〇）年ほど前には見か

けなかつたファックス、パソコン、携帯電話、テレビ電話等の通信手段が二〇世紀末には当たり前のもとなつた。とくに世界中のパソコンをつなぐインターネットの普及により、私たちは大量の情報を簡単に入手することが可能になり、国内はいうまでもなく外国とも瞬時に交信できるようになった。こうした事態は今後も衰えることなく、続いていくであろう。

情報化が私たちの暮らしを快適にしてくれていることは間違いない。インターネットを例にとれば、大きな時刻表がなくても交通機関の発着状況は簡単にわかるし、宿泊や宴会の予約や買い物も楽にできる。重要なニュースもすぐに伝わる。インターネットについては、それを使った様々な犯罪や有害な情報の流布等の問題が確かにあるが、そうしたマイナス面よりも今挙げたようなプラス面のほうがはるかに大きいであろう。

私は、情報化のそうした効用を認めた上で、あまりに多すぎる情報が人々の心身の健康を損なう可能性を危惧している。一日中パソコンに向かってしていると、目が疲れるし、血のめぐりも悪くなる。隣の席にいる同僚との会話もほとんどない。毎日パソコンを開くたびに届いている電子メールの山にうんざりし、それらへの返事を書くのにかなりの時間を費やさなければならぬ。落ちていて思考する習慣はなくなつてゆき、文書の切り張りをしても早く仕事を終えることだけが目的となつてくる。

忙しい日々を送る人ほど、休日ぐらひはパソコンにふれないようにした方がよいと思う。そうした時にはスポーツで汗を流したり、その他の趣味を楽しんだりすることも重要であろうが、私は読書を強くお勧めする。最近書物は、一部の軽い読み物を除いてあまり人気がないと聞く。比較的自由な時間があるはずの学生も読書から遠ざかつているし、学校を離れた人々も本をあまり読まないようである。情報化の中で他にこなさなければならぬ仕事が多すぎるためであろう。

だが、少なくとも休日の数時間、できれば仕事のある平日でもなるべく毎日、文学、歴史、哲学、自然科学等何でもよいから、また薄い本で構わないから、一〇年以上前に書かれて今でも読み継がれている書物を繕いてほしい。必ず何かが得られるはずである。今言及した一〇年間という歳月は決して短くない。それだけの時間を生き延びた書物には、何らかの存在理由があるに違いない。言いかえれば、一昔以上前の賢者との対話をぜひ楽しんでほしいのである。

一人ひとりの人間が生きている時間は、長寿社会とはいえ限りがあり、その間に読める本の量はたかが知れている。他方で、情報化の進展を反映して年々出版される書物の点数は増えているものの、その大部分は数か月で市場から消えていく。ベストセラーを読むな、という訳ではないが、情報の洪水に沈没して無益な時間を過ごさないためにも、読むに値する書物を厳選して読んだほうが結局は得である。

また、これも情報化を反映しているが、最近、コンピュータの画面上で読書をする電子ブック、さらには携帯電話でも読める携帯ブックが登場している。これらへの反対意見は多いが、私は、手軽に書物に接することができる、そうした「新しい本」の出現をむしろ歓迎したい。紙に印刷されていようと、液晶画面に映し出されようと、どちらでも構わない。要は良い書物を読む時間

阿部 武司 (あべ たけし)

1952年、東京都に生まれる。

東京大学大学院第二種博士課程単位取得退学。経済学博士(東京大学)。東京大学社会科学研究所助手、筑波大学社会科学系講師、大阪大学経済学部助教授・同教授、同大学院経済学研究科教授を経て、2014年大阪大学名誉教授・国士舘大学政経学部教授(現在に至る)。

2012年10月に2004年以来目指してきた大阪大学アーカイブズの創設を実現させ、半年後の2013年4月に同アーカイブズが公文書管理法に基づく国立公文書館等および歴史資料等保有施設に指定。



主な業績

『日本における産地綿織物業の展開』(東京大学出版会、1989年)、『近代大阪経済史』(大阪大学出版会、2006年)、『大原孫三郎』(編著、PHP研究所、2017年)、『The "Japan" Problem: The trade conflict between the European countries and Japan in the last quarter of the twentieth century』, *Entreprises et Histoire*, No.80, September 2015, pp. 12-35, など。

アーカイブズと私—大阪大学での経験— CPC リブレ No.12

2020年2月29日 第1刷発行

著者 阿部武司
発行者 川角功成
発行所 有限会社 クロスカルチャー出版
〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-7-6
電話 03-5577-6707 FAX 03-5577-6708
<http://crosscul.com>
印刷・製本 (株)シナノパブリッシングプレス

© Takeshi Abe 2020

ISBN 978-4-908823-67-1 C1000 Printed in Japan

A SYNOPSIS OF THE ARCHIVES AND I: Takeshi Abe's Experience at Osaka University.

Internationally common sense indicates that archives play an important role as are organized data base for providing diverse sources of information not only for scholars but also for governmental bodies at home and abroad and people in general. In today's Japan, however, it is highly regrettable that government documents have been concealed, disposed of and even altered. Now is the time for us Japanese to realize the importance of archives in preserving actual records.

The author of this book has been teaching business history at Osaka University for twenty-six years since 1988 and has been studying the economic and business history of modern Japan. When the radical reorganization of national universities as corporations went into effect in 2004, he was assigned the task of establishing an archive within Osaka University and it took him virtually ten years to complete the work. This book attempts to clarify the founding stages of the archive by employing his previous relevant essays he had written in those days and gives an account of a case study of the setting up of an archive which has now become a center of attention. He has also been engaged in the management of the University Library and the University Museum at Osaka University vis-à-vis the governmental reform of national universities, and he has been involved in exchanging ideas with corporate archivists' groups outside of the school. This book is based on such personal experience involving wide reading and the question of the fundamental foundation for deep thought. Furthermore, the humanities branch of studies is ignored by the Japanese government's insistence that the sciences are indispensable for the advancement of mankind. But the closed nature of Japanese Academe surrounded by the language wall of Japanese is indeed a controversial problem and he touches on the promotion of translation ability as a countermeasure to conquer that problem for the beneficial advancement of the cause of internationalization.